

石濱シユーレに集う人々

——四半世紀後に^①

長田俊樹

一、はじめに

一九九五年七月、日文研の辻惟雄教授が主催する「奇人・かざり研究会」で「石濱シユーレ・露人日本学者・言語学界三大奇人」と題して発表した。辻先生には「発表、なかなか面白かったので、ぜひとこかに書いてください」と言われて、すでに四半世紀以上が経つ。二〇一七年の日文研創設三十周年の会で、辻先生にお目にかかりたときにも、「あれなかなか面白かったですよ」と覚えておられた。しかし、残念ながら、このテーマで何か書いたことはこれまでない。小論は基本的に、その時の発表レジュメに基づいている。

一方、石濱純太郎の蔵書などが納められた石濱文庫（大阪大学図書館内）の整理に力を入れておられる堤一昭大阪大学教授に、この発表レジュメをお送りしたところ、ご自身の発表「石濱純太郎をめぐる学術ネットワークと石濱文庫の資料群」で「石濱シユーレ」という用語を使い、「石濱サロンや大阪東洋学会（一九二三年）、静安学社（一九二七年）、大阪言語学会（一九四二年）に集つた研究者たちをさす（らしい）」と説明されているのをみて、ますますこのテーマでまとめなくてはという思いを強くした。

筆者は日本言語学史に関心を寄せてきた。とくに、日本語系統論をめぐる学説史を発表してきた（長田俊樹 一九九八、二〇〇三、二〇〇五、二〇一七、二〇二〇）。しかし、石濱シユーレに集う人々

は正当なる日本言語学史にはたぶん登場しない。なぜなら、吉町義雄や浅井恵倫などの例外を除き、彼らは言語学科の主任教授として、名を連ねることがほとんどなかつたからである。彼らは多数の言語を駆使するポリグロットであり、あまり知られていない言語や文字を学ぶことが大好きだつた。別稿で取り上げた菊池慧一郎も、ポリ

グロットであり、プラトン哲学者としての名声を捨てて、新しい言語にどんどん挑戦し続けた人だつた（長田俊樹二〇二一^a、二〇二一^b）。こうした人々を顕彰し知つてもらおうと日本言語学史とは別に、日本言語学史外伝シリーズを書き始めたばかりである。小論の視点もどちらかといえば外伝に近い。

石濱シユーレとはなんだつたのか。小論では一九九五年の発表レジュメを基に、最近の研究成果も取り入れつつ、石濱純太郎の生涯と石濱の周りに集う人々を紹介しておきたい。

二、石濱純太郎の生涯

石濱純太郎（一八八八—一九六八）は大変有名な東洋学者である。

石濱の生涯を知るには、『石濱先生古稀記念東洋学論叢』（一九五八年刊行。以下、古稀記念と略す）に掲載された「石濱純太郎先生年譜略」（以下、年譜）と吾妻編（一〇一九・九一・二三）による「石濱純太郎先生年譜略 補訂版」（以下、補訂）がある。また、そ

の著作については、『古稀記念』に掲載された「石濱純太郎先生著作目録」（以下、著作目録）がある。^{〔3〕} 詳細はそちらを見ていただきたい。ここでは、年譜によつて石濱と彼が出会つた学者たちとの関係に注目してみておこう。ただし、年譜の年号を西暦のみで記した。

一八八八年八月二十七日 大阪生まれ。

一八九七年四月 泊園書院に入学し、藤澤南岳（一八四二—一九一一年七月 同大学卒業。卒業論文「歐陽脩攻究」（漢文）。

一九一〇年⁽⁴⁾ より業を受く。

一九〇八年十月 東京帝国大学文科大学支那文学科入学。

一九一一年七月 同大学卒業。卒業論文「歐陽脩攻究」（漢文）。

一九一五年 阪の文会「景社」に入会。

長尾雨山（一八六四—一九四二）、武内義雄（一八八六—一九六六）、糸山衣洲（一八五五—一九一九）を知る。

一九一六年七月 宇治花屋敷において、京都の文会「麗澤社」と景社の第一回連合会あり。

内藤湖南（一八六六—一九三四）、狩野直喜（一八六八—一九四七）、青木正児（一八八七—一九六四）、岡崎文夫（一八八八—一九五〇）、神田喜一郎（一八九七—一九八四）、小島祐馬

(一九八一—一九六六)、富岡謙蔵(一八七三—一九一八)、佐賀東周(一八八三—一九二〇)、那波利貞(一八九〇—一九七〇)、福井貞一(一九二五)、藤林広超(一八八八—一九八四)、本田成之(一八八二—一九四五)らと会う。

一九二一年
このころ石田幹之助(一八九一—一九七四)に会う。

一九二三年
羽田亨(一八八二—一九五五)と会う。

一九二三年六月
大阪東洋学会を創設。

一九二四年七月
内藤湖南に随伴し、渡欧。

一九二七年九月
静安学社を発起し、幹事となる。

一九四二年
大阪言語学会を創立発会す。

一九五三年
日本西蔵学会会長に推薦される。

一九五四年
なにわ賞を授与。

一九六八年二月十一日
死亡。

ここに登場する会や学者たちについて、簡単に時代に沿つて紹介しておこう。

まず、泊園書院は藤澤東暉(一七九四—一八六四)が大阪に開いた漢學塾であり、関西大学のルーツの一つとなる私塾である。その膨大である「泊園文庫」は戦後関西大学に寄付され現在に至つてい

る。藤澤南岳(一八四二—一九二〇)は東畠の息子である。石濱は満九歳の年から漢学塾に通つた。

西村天囚の本名は時彦で、天囚は号で、他に碩園とも名乗つた。種子島生まれで、東大古典講習科で学び、大阪朝日新聞社の記者として活躍し、明治維新とともに閉校となつた大阪の学問所、懐徳堂を一九一六年に再建した人物である。

景社とは、「(西村)天囚が設けた漢詩文鍛錬を目的とする結社」

(湯浅二〇一九・二九〇)で、その由来は「同人がみなが天満宮(菅廟)の近くに住んでいたため、賢者を仰ぐ(景)思いをことよせた」(堤二〇一九・三〇〇)と「景社同約」にある。年譜であげられた人々について、長尾雨山は「明治期の日本の漢学者・書家・画家・篆刻家である。狩野直喜(君山)・内藤湖南とともに中国学を開花・進展させたひとりに挙げられる」とウイキペディアで紹介されている。武内義雄は「中国哲学者。三重県の生れ。京都帝国大学を卒業後、東北大学教授、さらに宮内省御用掛として皇太子の教育に当たる。帝国学士院会員、文化功労者^④」とコトバンクにあり、『武内義雄全集』(全十巻。角川書店)が出版されている。糸山衣洲は漢学家として名高く、一八九八—一九〇四年には『台灣日日新報』の漢文部主任として活躍した。いずれも、漢学に秀でた学者である。

一方、麗澤社で出会つた人々は説明不要な大学者が多い。内藤湖

南は戦前日本を代表する東洋学者であり、狩野直喜、青木正兒、小島祐馬、那波利貞はいずれも京都大学で教鞭をとり、名誉教授となつたお歴々である。岡崎文夫、神田喜一郎、藤林広超、本田成之、いざれも京都大学出身で、岡崎は東北大、神田は台北帝大（のちに大阪市立大学、京都国立博物館館長）、藤林は同志社大学、本田は龍谷大学でそれぞれ教鞭をとつた。

富岡謙蔵は文人画で著名な富岡鉄斎（一八三七—一九二四）の長子で、幼少より病弱であつたため正規の教育を受けず、ほとんど独学で学問を修め、京大講師となつたが、四十六歳で早世した。佐賀東周は禅宗の僧侶で、福井貞一は書画骨董収集家として知られてゐる。^⑨

「年譜」にしたがえば、石濱純太郎が内藤湖南に初めて出会つたのは、宇治花屋敷での麗澤社と景社の第一回連合会だと思われていた。しかし、堤が石濱文庫にあつた「景社紀事」を丁寧に拾い上げ、「年譜」の訂正を行つてゐる。^⑩

石濱が最初に湖南に出会つたのは、一九一六年四月二十五日、枚方の占春樓で開かれた大阪の文会「景社」と京都の文会「麗澤社」の第二回連合会であり、ここで石濱は西村時彦の紹介で景社に加盟している。

從来、両者の最初の出会いとされてきた、「一九一六年七月

十六日 宇治花屋敷において、京都の文会麗澤社と景社の第一回連合会」とは、第一回ではなく、第三回の連合会で、場所は宇治の旅館・網代であり、出席者も若干異なる。（堤二〇一九・三二二一三二三）

石濱の年譜が今塗り替えられようとしている。^⑪とくに、石濱がいつ湖南と出会つたのか、堤（二〇一九）はそれをテーマに取り上げている。それほど石濱にとつて、湖南は大きな存在だつた。それについては後で述べる。

年譜に掲載された人物として、石田幹之助と羽田亨は特に紹介の必要がないであろう。石田は東大卒業後、モリソン文庫（現在の東洋文庫）を買い受けるのに奔走したことで知られ、彼の業績は『石田幹之助著作集』（全四巻）で読むことができる。また、羽田は京大総長となり、文化勲章も受賞した大学者である。^⑫

この羽田と知り合う時期について、「年譜」も「補訂」も一九二三年となつてゐるが、岡崎精郎によると、一九二三年六月十六日の「日記」にはこう記されている。^⑬

支那学会。羽田氏に始めて会ふ。今西博士^⑭に女真文や蒙古文のものを貰ふ事になつた。（岡崎 一九七九・一三八七）

つまり、「年譜」よりも一年前に、羽田亨と知り合っていたこと

になる。残念ながら、「補訂」にはこの岡崎の指摘が反映されていない。

大阪東洋学会、静安学社、大阪言語学会の三つがこの年譜に登場する。しかし、それらがどんな組織で、何をおこなつてきたのか、その詳細はあきらかではない。そこで、小論ではそれら学会とそこに集う人々に焦点をあて述べてみたい。また、石濱純太郎が設立にかかわったと思われるウラル・アルタイ学会や浪華芸文会については、これまで論じられたことがほとんどなかつた。これらの研究会についても小論で取りあげたい。ただし、石濱が設立にかかわった西蔵学会については、現在も日本チベット学会として活動が続いているし、分野がかなり限られてしまうので、小論の対象に含まない。

それでは、大阪東洋学会から順にみていこう。

三、大阪東洋学会

年譜によると、「大正十二（一九二三）年六月、Nicholas Nevsky 氏と大阪東洋学会をつくる」とある。

ニコライ・ネフスキイ（一八九二—一九三七）はロシア人研究者であり、石濱とともに西夏語を研究したことで知られる。加藤九祚（一九七六、二〇一二）の評伝が詳しいので、それにしたがつてネフ

スキーの生涯を振り返つておこう。

ネフスキイはサンクトペテルブルク大学で中国語、日本語を専攻し、一九一五年、官費留学生として日本に留学した。一九一九年、小樽高等商業学校（現・小樽商大）でロシア語教師を務めた後、一九二三年四月から大阪外国语学校（現・大阪大学外国语学部）に赴任し、当時、蒙古語部選科生だった石濱と出会つた。また、一九二三年から一九二九年、ネフスキイは京大でもロシア語を教えていた。¹⁵ その時の教え子が、後に静安学社設立に加わる高橋盛孝であり、静安学社に第二回集会から社友として参加した吉町義雄である。日本滞在中に、ネフスキイはアイヌ語、宮古島語、台湾原住民言語のツォウ語などのフィールド調査をおこなう一方、石濱とともに、西夏語研究にも従事した。一九二九年ロシアに帰国し、スター・リン時代の肅清によつて、一九三七年、銃殺された。

大阪東洋学会の名称について、石濱の日記には「大阪東洋言語学会設立に關して校長に面会せんとて居残りしも、ダメらしければ、ネフスキイに委任して帰る」と記されていたことを生田（一〇一九—一九五九）¹⁶ が指摘している。¹⁶ この時の校長は中目覚（一八七四—一九五六）であり、中目が大阪東洋学会の会長を務めることになる。一方、この同じ個所を引用している岡崎（一九七九—一三八八）は、「大阪東洋言語学会」と記されている点に「すでにその性格が明示されていよう」と述べている。じつさい、石濱はのちに大阪言語学

会を設立するよう、言語学へのこだわりはこの時からあつたことがわかる。生田（二〇一九・一九六）は「校長と話すうちに東洋言語学会より広い射程をもち多くの人が参加できる東洋学会をイメージするようになつていつた」と指摘するが、日記には「中目校長に会ふ。種々談ず。校長は学者向ぎでないから困る」（岡崎一九七九・一三八八）とあることから、生田の指摘のように、校長と話すうちに東洋学会をイメージしたとは到底思えない。

大阪東洋学会がどんな会合を開いていたか。

石濱文庫をくまなく探せば、何か手掛かりが発見されるのかもしれない。石濱文庫の整理をおこなつた岡崎によると、「学会としての活動、とくに研究例会についてはごく初期を除き、如何に成行いたかを詳かになしえない」と指摘している（岡崎一九七九・一三九二）。また、その後の石濱純太郎研究の成果も含む、吾妻編（二〇一九）をみるかぎりにおいても、大阪東洋学会の活動や研究会など、その実態はわからない。もつとも、設立後の一九二四年七月から翌年二月まで、石濱は内藤湖南に随伴してヨーロッパに行っていたため、大阪東洋学会の会合は開かれなかつたのかもしれない。

大阪東洋学会の後世への大きな貢献は会誌発行にある。それは『亜細亜研究』と呼ばれ、以下が発刊されている。最後に（国会）と記したものは国会図書館デジタルコレクションでダウンロードして読むことができるものである。

第一号 小倉進平「新羅語と慶尚北道方言」（一九二四年六月）
(国会)

第二号 渡部薰太郎〔⁽¹⁸⁾〕

伊徳均「蒙語動詞の活用と其種類」

第三号 渡部薰太郎「満洲語女真語と漢字音の関係」（一九二五年三月）
年二月⁽²⁰⁾
(国会)

第四号 渡部薰太郎「満洲語図書目録」（一九二五年三月）
(国会)

第五号 渡部薰太郎「満洲語図書目録」（一九二五年三月）
年二月⁽²¹⁾
(国会)

第六号 渡部薰太郎「馬來半島に於ける馬来語音の地方的差異に
關する若干の考察」（一九二七年十一月）
第七号 渡部薰太郎「満日対訳仏説阿弥陀経」（一九二八年十月）
(国会)

第八号 中目覚「獨訳オロツコ文典」（一九二八年十一月）
(国会)

第九号 渡部薰太郎「満洲語綴字全書」（一九三〇年三月）
(国会)

第十号 中目覚「氣候と歴史」（一九三二年六月）
(国会)

第三号 渡部薰太郎「増訂満洲語図書目録」（一九三二年十月）

「学会」では、東洋の諸言語研究がおこなわれることを念頭においていたことがうかがえる。ただし、十号だけが異質である。中目が当

第十一号 渡部薰太郎「女真館來文通解」（一九三三年十月）（国

会） 第十二号 渡部薰太郎「女真語ノ新研究」（一九三五年一月）（国

会） 渡部薰太郎「女真語ノ新研究」（一九三五年一月）（国

会） 渡部薰太郎「女真語ノ新研究」（一九三五年一月）（国

亡父長田夏樹は「大阪東洋学会の『亞細亞研究』と『奉天図書館叢刊』について」を『水門——言葉と歴史』第八号に発表している。

かつての文献研究は文献にいかにアクセスできるかという点も含めた研究なのだが、夏樹はこうした文献資料収集には貪欲だつた。

「大阪外大の図書館にもそろつていない」という岡崎精郎君の話を思い出し」（長田夏樹一九六六・一八）、『亞細亞研究』の紹介をしたといふ。この夏樹の紹介でも、岡崎や生田による紹介でも、『亞細亞研究』は第十二号十三冊ということになつていて。しかし、注で示したように、第二号の増訂版が一九三三年に出版されているので、

第十二号十四冊ということになる。

取り上げられているのは朝鮮（韓国）語、蒙古（モンゴル）語、西夏語、満洲語、女真語、オロツコ（ウイルタ）語、ニクブン（ギリヤーク）語で、すべて東洋の言語である。つまり、このラインアップを見れば、石濱が最初に考えていた名称「大阪東洋言語学会」でもまつたく問題がない。つまり、石濱が意図した「大阪東洋

は四十八歳の時のことだ。晩学ながら、『亞細亞研究』として満洲語や女真語に関する著作をまとめている。満洲文字を組版することもままならぬ時代に、自分で鉄筆をふるい、贋写版として出版している。大いなる熱意と奮闘努力が結集したのが渡部薰太郎の満洲語研究なのである。

なお、『亞細亞研究』の執筆者のうち、小倉進平（一八八二—一九四四）は後に東大教授となり、朝鮮語研究者として知らぬ人がないほど有名である。また、浅井惠倫（一八九四—一九六九）はこれから述べる静安学社にも参加することになるのだが、オーストロネシア語研究、とりわけ台湾原住民言語研究で有名な言語学者である。

四、静安学社

静安学社の由来について、石濱は以下のように述べている。

今春大阪地方へこられた高橋盛孝君が一日何か一會を設けて同臭会合に便し研究討論に資する様にしては如何と提議せられた。僕も賛成しネフスキ君も賛成とあつて、六月の初め寄合つて相談した。で愈々実行しやうではないかと申合わせた。会名は一つ我々の景仰する誰か先儒の名を冠したものにしては如何

と云ふことになり、東西の碩学を銓考した。するとネフスキ先生が一両日前王国維先生が亡くなられたと聞いたがほんとだらうか、ほんとしたら王先生の名を記念しては如何と言つた。僕はそんな話をちつとも知らなかつたので、驚いて他の人の誤だらうと否定した。兎に角三人共に王先生には亡くなつて貰ひたくなかつたもんだから、何かの誤としておいて、一方神田鬯龕君に聞合せる事とした。噂は眞実であつた。已に故人とあれば丁度我々の会に採つて冠し得るは好記念である。殊に静安先生の学行は我等の儀表と仰いで然るべきものだ。静安学社—Societas in Memoriam Wang Kuo-wei, これこそ我等の会名でないか。

かくして我々の静安学社は生れ出た。静安先生の名を冠するを誇とする我々はその名に背かざる実をあげねばならない。

（高田編二〇一八・八二）

こうして静安学社は、「浅井（惠倫）、石濱、財津（愛象）、高橋、ネフスキは社員に、神田（喜一郎）、吉田（銳雄）は社友として学社は成立し」（静安学社通報⁽²⁾、第一号、六頁）、幹事には石濱と高橋が就任した。また、第二回集会では、「プレトネル（石濱紹介）、小林太市郎（石濱紹介）、吉町義雄（ネフスキ紹介）は社友に加はつた」（通報一号、九頁）。さらに、第三回集会では、「石田幹之助、熊澤猪之

助（共に石濱紹介）は社友となつた」（通報一號、一〇頁）。たつた五名の社員と二名の社友で始まつた静安学社も、岡崎（一九七九・一四〇〇）によると、一九四一年段階で社友は実に五十七名を数えるようになった。²⁴ 戦前の自由に学問が許される雰囲気ではなかつた時代に、こんなに社友が増えていつたのは驚くべきことである。

なお、「年譜」でも「補訂」でも「浅井恵倫、笛谷良造、高橋盛孝、Nicholas News²⁵ の諸氏と静安学社を発起し幹事となる」とある。しかし、「通報」をみるかぎりにおいて、笛谷良造（一九〇一—一九六九）は設立時に参加していないし、第三回の集会まで参加していない。²⁶ 「年譜」の修正が必要である。

上で挙げられた社友のうち、吉町義雄（一九〇一一一九四）は九州方言を研究したことで知られる言語学者である。また、高橋盛孝（一八九九—一九八〇）は東大中国哲学を出たのち、京大大学院に学び、一九二六年から関西大学で民俗学や文化人類学を教えた人である。²⁷ 財津愛象（一八八五—一九三二）は熊本県で生まれ、広島高等師範国語漢文部を卒業し、のち京大で支那文学支那語学を専攻し、静安学社設立時は大阪高校教授だつた。しかし、静安学社成立の四年後に四十七歳（数え）で亡くなつてゐる。敦煌文書に関心を寄せていた。²⁸ 吉田銳雄（一八七九—一九四八）は重建懐徳堂（江戸時代の懐徳堂とは区別してこう呼ぶが、「懐徳堂」と略す）の助教授を務めていた。この二人は漢学出身者であり、懐徳堂に関わっていた人

たちである。というのも、静安学社の会合はつねに懐徳堂で行われていたから、懐徳堂の関係者にも参加してもらう必要があつたのであろう。

ブレトネルについては生田（二〇一九）に紹介されている。それによると、一八九二年ペテルブルグで生まれ、一九一一年ペテルブルグ大学東洋語学部中國語・日本語科に進学し、日本語を専攻し、静安学社に加盟したころは天理外国语学校でロシア語を教えていた。ロシア革命後は一度もロシアに戻らず、一九四一年からベトナムのハノイ大学でフランス語と一般言語学を教え、一九五〇年から再び日本に戻つて、一九七〇年、日本で亡くなつてゐる。

小林太市郎（一九〇一一一九六三）については京都西陣生まれで生家も西陣織の織り元で、京都帝国大学哲学科卒業後、ソルボンヌ大学に留学した美術史家である。ウイキペディアには以下のよう掲載されている。

博覧強記と広い視野に支えられつつ大胆な推論を展開するため、通常の実証的な学者にはない魅力を持つが、批判されることも多い。（中略）神戸大学における講義でも博学ぶりが評判であり、学生だけでなく教員たちも聴講に来るほどであつた。だが、教授会に一度も出づに研究に専念し孤高の姿勢を貫いたことなどで、業績に見合うほどの学界的地位は得られなかつたといわれ

なかなかユニークな学者で、東洋学とは一見かかわりがなさそうだが、石濱に吸い寄せられた「奇人」の一人なのだろうか。⁽²⁹⁾ 教授会に一度も出ないと今なら即刻首である。

最後の熊澤猪之助は大阪府立高津中学（旧制）の教諭である。泊園社編輯同人に名前を連ねている（吾妻二〇一七）。それ以上のことはわからない。

静安学社の規約の中に、社員（のちには社友）は「一年一回以上

研究成果を本学社により発表するの義務あるものとす」とある。岡崎（一九七九・一三九五）も、生田（二〇一九・二〇一）もそこに注

目しているが、実際にはすべての社友が発表することはなく、社友が増えていくと共に、名ばかりの規約になつていった。手元にある、

静安学社一覧によると、昭和十一年度（一九三六年九月～一九三七年七月）から昭和十五年度（一九四〇年九月～一九四一年七月）までは研究発表者とその題目が掲載されている。その間の発表者はかなり偏っている。年七～八回の開催で、石濱の発表数が圧倒的で三十一回に及ぶ。続いて、西田長左衛門⁽³⁰⁾が十五回、高橋盛孝が十一回である。「大阪東洋学会より静安学社へ」を執筆した岡崎精郎も、

一九四一年六月に「党頂勃興過程の一考察」と題する発表をおこなつてている。

ところで、「年譜」や「補訂」では「昭和十一（一九三六）年六月 静安学社幹事を解かる」とある。これだけを取り上げると、静安学社での石濱の活動が沈静化したようにみえる。しかし、実際はまったく逆である。今みたように、幹事を下りてからの発表がじつに三十一回にも及んでおり、研究発表という点ではますます活発になっている。一方、石濱のあと幹事を務めたのは岩代吉親⁽³¹⁾と金戸守⁽³²⁾である。彼らが静安学社で果たした役割はとても大きいとは思えない。石濱が幹事を辞めた後は、幹事は名ばかりで、ほとんど事務的になつていった。それが実態であろう。

なぜ大阪東洋学会を設立して四年後に、今度は静安学社を設立したのであろうか⁽³³⁾。ここからは筆者の推測に過ぎないが、その理由を以下の日記の記述に探ることができるのでなかろうか。岡崎によると、一九三三年十一月十五日に石濱の日記にこう記されている。

校長が「大阪東洋」学会の事を彼れ此れ云ふさうなので面会する。雑誌を早くなんて云つていた。学問なんか分らん男はいやだ。（岡崎精郎 一九七九・一三八九）

これ以後、日記には大阪東洋学会に触れるることはなかつたといふ。また、『亜細亜研究』発刊についても、中目にせかされていたこと

を思うと、『亞細亞研究』の執筆者選考に、石濱の思う通りには行かなかつた部分があつたのだろう。じじつ、『亞細亞研究』について、岡崎（一九七九・一三九二）は『『亞細亞研究』の執筆者は、当時、朝鮮、朝鮮総督府編修官であつた小倉進平氏を除いては、すべて大阪外語の教官で占められており、事実上、大阪外語に直結したものであつ』たと指摘している。

これまで大阪東洋学会を設立した石濱とその学会誌ともいべき『亞細亞研究』は一体と考えられてきた。しかし、それを改める必要がある。つまり『亞細亞研究』で出す論文は大阪外語学校長であつた中目覚主導で決められていたのではなかろうか。しかも「大阪東洋学会」会長の中目覚と「静安学社」を設立した石濱純太郎の間には、深い溝ができていただのではなかろうか。

それを示す根拠をいくつかあげることができる。箇条書きにして、以下にあげておく。

(3) 『亞細亞研究』第三号の増訂版（一九三二年）には、冒頭に中目が満洲国執政溥儀に奉呈した漢文が掲載されて、「本篇ハ大阪外國校語學長満洲視察際執政溥儀閣下ニ閱シ大阪東洋学会ヲ代表シテ奉呈セラレシモノ」と但し書きがつけられている。大阪東洋学会の代表者としての中目覚がクローズアップされている。このことは石濱の手から完全に離れていることを示している。

(4) 静安学社の名で『東洋学叢編』が一九三四年に出版されている。この本の裏表紙にラテン語で静安学社の名前が記されている。そこには *Societas Orientalis Osaka'ensis in Memoriam Wang Kuo-wei* とある。日本語にすれば、これこそ「王国維記念大阪東洋学会」にほかならない。初期の段階での静安学社の横文字表記は *Societas in Memoriam Wang Kuo-wei* で「王国維記念会」であった。つまりその当時はまだ大阪東洋学会と一線を画す気はなかつたのだが、後に静安学社こそが大阪東洋学会にふさわしいことを自らが宣言して、こう名付けたのではなかろうか。⁽³⁵⁾

(5) 中目覚にがつかりさせられる事件があつたこと。それは国語学者龜田次郎（一八七六—一九四四）が一九二四年に大阪外語

は社友として掲載されている。また、渡部が亡くなつたときに、石濱が追悼文（高田編二〇一八・九七一〇〇）を書いていることから、石濱と渡部の仲が悪かつたわけではなさそうだ。

当局から休職を命じられたことである。石濱はこれにかかわつた学校当局を難じ、「亀田氏は種々短所はあつても、学者としては沢山ある人でないのに、大阪又外語としても学者が極めて少いのに残念だ」と日記に記している（岡崎一九七九..一三八九）。石濱が立派な学者と認める亀田次郎に対し、外語からの休職を命じた校長こそ中目覚であつた。

以上、石濱純太郎が中目覚主導の大阪東洋学会と袂を分かつたとみられる間接的証拠をあげた。これらから、大阪東洋学会から四年後には新しい静安学社を結成した理由を次のように推察したのであるが、いかがであろうか。

石濱は大阪東洋学会が「学問なんかわからない」中目大阪外語学校長の主導でおこなわれることに不満があつた。それならば真に東洋学をこころざす友人諸氏と別の学会を作ろうと静安学社を設立したのではないか。あくまでも私見であるが、その可能性は高いとみてている。

五、大阪言語学会

「年譜」によると、「昭和十七（一九四二）年一月 大阪言語学会を創立発会す」とある。

しかし、それ以上のことはこれまでの石濱純太郎研究のなかで論じられるることはなかつた。父・長田夏樹が残した資料の中に、一九四九年の大阪言語学会例会の通知はがきがある。^{〔36〕} それによると、大阪言語学会は事務局として川崎直一の家の住所が記載されている。それを手掛かりに推測すると、『大東亜語学叢刊』の刊行と関係があると思われる。じつは、このシリーズが監修羽田亨、編輯石濱純太郎と川崎直一になつてゐるからである。

川崎直一（一九〇一—一九九二）とはどんな人だつたのか。^{〔37〕}

川崎はエスペランチストとして有名で、『基礎エスペラント語』を出版している。大阪に生まれ、石濱の出身校である市岡中学卒業後、東京に出て早稲田大学のフランス語学科に入学。しかし病気で中退し大阪に戻つてきた。そして、大阪外国语学校選科や別科でドイツ語、ロシア語、中国語を学び、第二次世界大戦中はアラビア語辞書編纂を手伝つていた。戦後、大阪外国语大学の教授として、エスペラント語をはじめ、ビルマ語やギリシア語・ラテン語を教えたという典型的なボリグロット（多言語使用者）である。

つぎに、石濱とともに編集に携わつた『大東亜語学叢刊』についてみておこう。

このシリーズはわずか『マレー語』（宮武正道著）と『樺太ギリヤーク語』（高橋盛孝著）の二冊だけが刊行されている。その刊行された『マレー語』に掲載された監修者羽田亨の「序」からみていこ

う。

東亜共栄圏現の叫びが高まるにつれ、これと並行して我が國民に最も緊要なる事項の一つとして要求せられたのが、亜細亞諸国に行はれる言語の知識を得ることであつた。實にこの知識の欠如を顧ることなしに、一途に指導力を標榜して共栄の面に乗り出すのは、その勇気は嘆賞に値するとしても、實際上における困難は、例へば船なくして大海を渡らうとする有様にも比せられるべきであらう。朝日新聞社が昨春逸早く本叢刊の編纂を企て、この困難を救ふと共に、廣く亜細亞諸民族に対する認識を深める一助としようとしたことは、誠に適宜の計画であつたといはなければならぬ。爾来既に一年、実用的にして言語学的、平明にして高い水準、入門書にして新しい研究といふ編纂方針の下に、それぞれ述作に當られた専門家各位の苦心がこのほど漸く功を成し、逐次刊行を見ることになつたのは幸慶の至りである。(羽田亨 一九四二・三)

このシリーズは朝日新聞社が一九四一年に編纂を企画し、第一冊目がこのマレー語である。羽田の序文をみると、「船なくして大海を渡らうとする有様にも比せられるべき」と言語の知識なしに、共栄圏は成り立たないとなかなか説得力がある。さすがに、京都帝国

大學総長である。また「実用的にして言語学的、平明にして高い水準、入門書にして新しい研究」とあるが、ずいぶんと欲張った企画だ。ただ、刊行された『マレー語』をみると、學問的というよりも、入門書的色合いが強い。

羽田のあと、石濱の序がつづく。その序の中に、執筆者の宮武正道を紹介した一節を見ておこう。

宮武君は我らの非常に若い友であるが、天理外国语学校にマレー語を修め、その後広くマレー語を含む南洋語族を研究し、また出でてジャバ島に巡遊視察したのである。インドネシア人との交際も広くマレー語新聞にも関係してゐる。著書はマレー語以外に、我が内南洋パラオ語の研究に関するものもあり、またマレー人のために日本文典をも書いてゐる。篤学といふばかりでなく熱意と実践力のある青年学者である。エスペランチストたる君がここに我らのために大東亜海の國際補助語マレー文典を書いてくれたことを感謝する。(石濱 一九四二・八・VIII)

宮武正道(一九一二—一九四四)はまさしく石濱シユーレに属する研究者である。しかし、三十二歳の若さで病死してしまつた。^{〔38〕}この『大東亜語学叢刊』のラインアップを宮武(一九四二)の最終頁に掲載された廣告を基にみておこう。

川崎直一「キルギス語」

三田村泰助「満洲語」

高橋盛孝「樺太ギリヤーク語」(近刊)

関西大学教授
立命館大学教授

高倉克己「北京語」(近刊)
小川環樹「蘇州語」

東北大助教授

吳守礼「廈門語」
鄭兆麟「廣東語」

天理外語教授

江 実「蒙疆蒙古語」
服部四郎「新バルガ蒙古語」

蒙疆中央学院

東大講師
外務省嘱託

青木文教「チベット語」
笠井信夫「安南語」

江尻英太郎「タイ語」(近刊)

台北大教授

浅井惠倫「タガログ語」(フィリピン)
泉井久之助「チャモロ語」

京大助教授

宮武正道「マレー語」(既刊)
浅井惠倫「ジャワ語」

台北大教授

矢崎源九郎「ビルマ語」
澤 英三「インド語」

大阪外語教授

澤 英三「ペルシア語」
中野英次郎「アラビア語」

大阪外語教授

大久保幸次「トルコ語」
石濱純太郎「ウズベック語」

大阪外語教授

中野英次郎「アラビア語」
大久保幸次「トルコ語」

大阪外語教授

大久保幸次「トルコ語」
石濱純太郎「ウズベック語」

関西大学教授⁽⁴⁹⁾

高橋盛孝「樺太ギリヤーク語」(近刊)
小川環樹「蘇州語」

三田村泰助
立命館大学教授
東北大助教授
天理外語教授
蒙疆中央学院
東大講師
外務省嘱託
江 実
青木文教
笠井信夫
江尻英太郎
台北大教授
京大助教授
宮武正道
浅井惠倫
台北大教授
矢崎源九郎
澤 英三
大阪外語教授
澤 英三
大阪外語教授
澤 英三
大阪外語教授
大久保幸次
石濱純太郎
関西大学教授⁽⁴⁹⁾

合計二十二冊、中国語が四方言もあり、アジアの諸言語をほぼ網羅したようなラインアップである。ただし、朝鮮語やカンボジア語など、書き手がいなかつたのか、当然含まれてしかるべき言語がかけている。執筆予定者のうち、浅井、石濱、泉井、笠井、川崎、澤、高橋、宮武の八名は静安学社の社友である。彼らは大阪言語学会のメンバーでもあつたのではなかろうか。⁽⁴⁹⁾ また、一九四九年の大坂言語学会で発表している高倉克己は大阪言語学会のメンバーだったことはまちがいなかろう。⁽⁴⁹⁾

執筆予定者の所属をみると、静安学社の社友以外でも、関西の大学を卒業した、あるいは関西の大学に在籍した方が圧倒的に多い。三田村泰助(一九〇九—一九八九)は京大東洋史出身でのち立命館大学教授、小川環樹(一九一〇—一九九三)は京大支那文学出身でのち京大教授、江実(一九〇四—一九八九)は京大言語学科出身、のち岡山大学教授、青木文教(一八八六—一九五六)は龍谷大学出身、矢崎源九郎(一九二一—一九六七)は東大言語の出身だが、一九四五年には大阪外事専門学校教授、中野英次郎は大阪外語教授と大阪や京都に関係する人がほとんどである。関係がないのは服部四郎(一九〇八—一九九五)と大久保幸次(一八八七—一九五〇)ぐらいだろうか。

変わつた経歴の江尻について述べておこう。⁽⁴²⁾ 一九一四年バンコクで生まれ、バンコクの日本人小学校最初の卒業生だつた。一九四二年慶應大学に設置された外国语学校でタイ語を教えていた。そのときには、石濱の目に留まつたのかもしれない。なお、ここで出版予定の『タイ語』は『大東亜語学叢刊』としては日の目を見なかつたが、一九四四年大八洲出版から『タイ語文典』として出版されている。

これら予定の本は實際には二冊（『樺太ギリヤーク語』と『マレー語』）を除いて出版されなかつた。しかし、この出版計画に合わせて、準備したと思われる文法書が存在する。たとえば、今述べた江尻の『タイ語文典』は別の出版社から出ている。また、戦後朝日新聞社から、澤英三が『印度語入門』を出版している。さらに、矢崎

戦争は十六年の暮よりはじまる。しかしその下においても、出版社当局と印刷社の熱意およびあへて進行と校正の任にあたられた各位の努力によつて、組版は順次に進められた。しかし戦局の展開に伴ふ諸種の事情の転変はつひに本書の上にも及んで印刷資材の窘窮と微発、努力の減退と不足とは漸くその進行を阻んで來た。印刷の面より見ても、本書のごとき量と複雜さとをもつものの処理は、いづれの出版者いづれの印刷者にとつても、それ自体が一つの事業である。しかし急迫した空気のなかに、二十年に入つて本書の前半は印刷を全く完了して、三月には製本を開始し、後半の組版も別途に京都において大いに進行せしめることができた。まことに当事者各位の努力と犠牲による。そして三月十四日未明は大阪の大規模な空襲である。本書の前半は、工場において、その紙型とともにやけた。

終戦後の別殊な社会的困難は、また戦時のそれを摩するもの長いが引用する。

この『大東亜語学叢刊』は日本語でアジア諸言語の文法記述をおこなうことを目指していたが、ほぼ同時期に翻訳の計画があつた。それは同じく朝日新聞社より戦後の一九五四年になつてようやく出版された『世界の言語』（メイエ、コーラン監修）の翻訳出版である。その編者である泉井久之助はその出版経緯をこう述べてゐる。少し

本書は、はじめ、その訳書の実行的な立案を見、訳者たちの会合においてその打合せを了したのが、昭和十六年の初冬であつた。爾来われわれの訳業は順調に進捗して、翌十七年の五月にはすでに集稿を見て、その夏には全般の校訂と編輯の指示を終り、印刷を開始することができた。立案から印刷の開始までに、いまだ一年を観てゐなかつたのである。ひとへにわれわれの深い協力の結果である。

がある。朝日新聞社の出版当局が本書の組版を再びはじめから起すについて払はれたところのあらゆるものに対し、われわれには全く感謝のことばがない。わが国の文化に対する犠牲的な熱意がなくして、どうしてこの種のものの刊行を敢て再び企画することができよう。いはゆる採算は、はじめから顧られてゐなかつたのである。——印刷所の誠意にも、またわれわれは深く謝するところがある。(泉井一九五四・V-VI)

この泉井の序によると、この翻訳計画は一九四一年に打ち合わせが終わり、一九四二年にはすべての原稿がそろつていたことになる。しかし、それが本の形で出版されたのは一九五四年である。いかに戦中・戦後の出版が困難であつたか。泉井の序からはその難しさが伝わってくる。この『世界の言語』はフランス語の原著があり、たぶん原著者や出版社との契約もあつたと思われることから、戦後、採算を度外視して、なんとか出版にこぎつけることができた。しかし、『大東亜語学叢刊』は戦後に再刊されることがなかつた。この泉井の序からは、その辺の事情も容易に推測できるのではないか。

『世界の言語』の翻訳には、静安学社の社友が多くかかわっている。石濱純太郎が支那西藏諸語、川崎直一がフィノ・ウグール諸語およびサモイエード諸語、高橋盛孝が極北諸語とアメリカ諸語、笠

井信夫が南アジア諸語、吉町義雄が古代前アジア固有諸語とバスク語、北コーカサス諸語、南コーカサス諸語、泉井久之助が編者となり序説やマライ・ポリネシア諸語などを、それぞれ担当している。この翻訳も静安学社、あるいは大阪言語学会の成果⁴³と言つてもいいのではなかろうか。

これまで見てきたように、『世界の言語』の翻訳と『大東亜語学叢刊』の編纂はいずれも一九四一年に朝日新聞社によつて計画されている。一方、大阪言語学会は一九四二年二月に設立されている。これは単なる偶然ではない。これらの出版計画が大阪言語学会設立の大きな契機だつた。そう推察してまちがいないだろう。

戦中戦後の混乱期を経て、『大東亜語学叢刊』は途中でとん挫してしまつた。しかし、大阪言語学会（事務局川崎直一自宅）は戦後も存続していく。静安学社も活動休止したわけではない。さらに、後述するウラル・アルタイ学会（事務局大阪外語蒙古語研究室氣付）という学会も加わつて、共同の会も催されている。

父・長田夏樹が残した資料によると、一九五一年四月二十二日に「ラムステット博士追悼会」が開催されている。以下に、その案内を紹介する。

大阪市天王寺区上本町八丁目

(中略)

大阪外国语大学にて

一九二〇年二月二二日、ラムステッドはフィンランド初代公

I. 総会（前年度事業報告および会計報告。幹事改選）

II. 例会（故ラムステット博士追悼会）

講演⁽⁴⁵⁾

川崎直一「ラムステット博士をしのぶ」

石濱純太郎「ラムステット博士の著書について」

西田龍雄「古代アルタイ語学私見」

石本健「フィノ・ウグリヤ諸語における戸替の痕跡」

長田長樹「題未定」

ラムステット博士の著書を展観いたします。

今回わ ウラル・アルタイ学会 静安学社との共同で催します。

ラムステット（上の案内での表記はラムステット）とはどんな人だつたのか。⁽⁴⁶⁾ ウイキペディアに以下のように掲載されている。

グスターフ・ヨーン・ラムステッド (Gustaf John Ramstedt
一八七三年十月二十二日、フィンランドのウーシマー県エケネース

一九五〇年十一月二十五日、ヘルシンキ) は、フィンランドの

東洋語学者で、アルタイ比較言語学の権威。また、フィンランドの初代駐日公使を務めた。エスペランティストでもある。

石濱純太郎自身の言語学への関心について、一言述べておこう。石濱の著作目録を眺めると、回鶴（ウイグル）文や蒙文、西夏文などのタイトルが並び、これらは言語学的な側面がある。しかし、

研究の主体としては文献研究であり、歴史研究である。言語そのものを持ったといふことといえば、カールグレンの “Le proto-chinois, langue flexionnelle” (1920) を紹介した「書評—カルルグレン氏原支那語考」(一九二一) や「書評—A Mongolian Grammar, outlining the Khalkha Mongolian with notes on the Buriat, Kalmuck, and Ordoss Mongolian」(一九二七) が比較的古いものである。しかし、これらは書評であつて、論文ではない。

純粹に言語についてだけ述べたものといえば、「満蒙言語の系統」(一九三四) と「メラネシア語派の研究」⁽⁵⁰⁾ (一九四二) である。前者は言語の系統に関するものであり、後者は「メラネシア語研究の書誌を目的として」書かれたもので、言語の記述はまつたくない。そこで、前者をとりあげてみたい。

石濱がウラル・アルタイ学会の設立に関与したことは後でみるが、この「満蒙言語の系統」では、ウラル・アルタイ語族は「これを二分してウラル系アルタイ系とするに至つた」(石濱一九三四・五) として、ウラル・アルタイ語族が成立するという立場をとつていない。

また、「アルタイ語就中満蒙言語の研究に充分に這入らうと思ふ人々はロシア語を先づ習得して置く必要がある」(六頁) と述べ、ロシア語で書かれた文献を推奨し、また石濱の記述はメイエ・コーアン『世界の言語』のなかのドニイに依拠していることをあきらかにしている。また、蒙古語語族の分類はウラヂミルツォフにしたが

い、ツングース語族はシロコゴロフにしたがつてゐる。つまり、これまでの研究で石濱が最善と考える文献を使つて記述している。また、文献で確認できる文語についての記載も豊富である。しかし、自分の独自の解釈を示したり、フィールドワークで集めたデータを使つたりはしていない。文献的研究に終始していることは指摘しておく必要があろう。

「アルタイ語学の参考書として何を挙げたらいいのか僕はよく知らない」(七頁) とか、「僕の知つていることはこれ丈である」(三九頁) とか、各国の研究者が競う契丹文字解説研究をオリンピックに例え、「」の国際オリンピック競技にも我が日の丸の国旗を早く掲揚したいものだ」(五一頁) とか、自分の知識をひけらかしたり、自分の解釈を押しつけたりするところがまつたくなく、およそ論文の形式とはかけ離れ、自由闊達に書かれている。また、「吾友」というのがあちこちに登場し、とくに若い研究者への研究成果に期待を寄せている。

以上、簡単に石濱の言語に関する論文をみたが、権威とは無縁の研究成果の出所や引用元をはつきりと示した論文である。人文学の研究者というと、自分の研究が盗まれてしまうのではないかとオープンな態度をとらない人も多いなか、石濱の論文は非常にオープンである。この態度こそが石濱シユーレを生み出したのではないか。そう実感させるのに十分である。

大阪言語学会がいつまで活動を続け、いつ活動休止にいたつたのか等々、その活動実態について、まだまだ分からぬことが多い。⁽⁵²⁾ 今後も探求を続けていきたい。

六、ポリワーノフと言語学会三大奇人

一九九五年の発表では、「露人日本学者」として、エリセーエフ（一八八九—一九七五）、ポリワーノフ（一八九一—一九三八）、コンラド（一八九一—一九七〇）、ネフスキ、プレトネルを取り上げたが、ここではポリワーノフについてだけ、みておこう。というのも、冒頭であげた辻先生が感心していたからである。

ポリワーノフについて、ポツペの衝撃的な紹介文がある。少し長くなるが、これをぜひみておきたい。

ペトログラード・レニングラード大学の私の最も早いころの思い出のひとつは、ポリワーノフに関係のあるものである。

一九一八年一月のある日のことであるが、新学期のはじめに私は大学に出かけた。ポリワーノフの講義を聞くためであつた。これが彼との最初の出会いであつた。私は新入生で、以前にポリワーノフを見たことがなかつた。噂によると卓越した学者で、その講義はすばらしいということであつた。ロシアにとつて第

一次世界大戦は終つたばかりであつたが、内乱がはじまつていた。そこで大学に来る学生も少なかつた。

その日に集まつた学生は多くなかつたが、長く待つ間もなく、教授が姿をあらわした。しかし、何という姿だつたろう！ひげもそらず、乱れ髪で、顔を洗つたのは何日も前のようにあつた。教室は寒かつたので、ポリワーノフはオーバーを着たままだつたが、そのオーバーたるや古びた軍隊の大外套で、汚れていて、いくつものボタンが無くなつてあり、数か所が破れていた。ポリワーノフの顔は腫れぼつたく、目は血ばしつていて、見るからに恐ろしい姿で、とても大学教授とは見えなかつた。スマム街から来た浮浪者としか見えなかつた。それに、片手であることに私は気付いた。酒に酔つて市電のプラットフォームから倒れたとき、片手を失くしたことをずっと後に知つた。ポリワーノフから受けた第一印象は破滅的であつた。すぐに教室から抜け出して、二度と来まいというのが私の最初の衝動であつた。しかしうテニ語の諺にあるように、Species fallit.（外觀はあざむく。人は見かけによらぬもの）。すぐに、私は教室を脱け出してはならないどころか、再び来なければならぬことをさとつた。（ポツペ一九七六「E. D. ポリワーノフの思い出」i頁）

最初の出会いは衝撃的である。ポリワーノフはピアニストを目指していたが、片手が無くなつたために、ピアニストをあきらめたのだ^{〔53〕}。ポツペの思い出はポリワーノフの偉大なる業績について触れた後、こう結んでいる。

ポリワーノフはいろいろな欠点に加えて、麻薬常習者であつた。一九二〇年ころ大学の家に住んでいたが、泥酔して又は麻薬で興奮して、しばしば口論をはじめたり、女子学生の室に闖入しようとしたりした。有名なソ連作家のカヴェリンの『乱暴者』という小説の主人公はポリワーノフである。ポリワーノフの乱れた行動を止めさせるために警察はあれこれと処置をとつたが、無駄絵であつた。相変わらずアルコールと麻薬の常習者であつた。投獄されて麻薬をとめられたのが余りに急であつた。そして一九三八年一月二十五日に獄死した。（中略）

以上、ポリワーノフがどんな人間であつたかを見てきた。一方では偉大な学者であり、他方では大酒のみで、まつたくの墮落者であつた。ジキル博士とハイド氏が実在したとするなら、それはポリワーノフであつた。この短い回想を結ぶにあたつて、

私は自分に問うてみる：「ところで、お前自身のポリワーノフに対する判断はどうなつか」と。その答えとして、私は「宝石は汚物だめに落ちても宝石に変わりない」というサンスクリッ

トの古い諺を挙げる。（ポツペ一九七六「E. D. ポリワーノフの思い出」iv—v頁）

ポリワーノフはとにかく逸話の多い人であつた。ネフスキイの伝記をまとめた加藤九祚によると、「ポリワーノフは逸話に富む奇人のひとりで、八〇の言語に通じ、すべての論文をカフェーで酒を飲みながら書いた」とある。

筆者の手元にある資料をみると、ポリワーノフは静安学社の社友になつたことはない。『静安学社通報』第一号にコンラド（通報ではコンラト博士とある）が発表した「サウエトロシアに於ける東洋学研究」が掲載されている。そこに、以下のように言及されている。

ポリバノフは従来の拉丁文法に則るやり方をよし純東洋風の文法を新作し三十六の東洋語八十余の諸方言を使つた言語学入門書を書いた。これは言語学に一時期を画する書だ。（通報、七頁）

したがつて、石濱がポリワーノフのことをよく知つていたことはまちがいない。しかし、石濱とロシア東洋学者たちの日ロ文化交流を述べた生田（二〇一九）もポリワーノフには触れていない。これ

までのところ、ポリワーノフと石濱の交流は確認されていないようだ。^[34]なお、小論の元となる発表は「奇人研究会」でおこなわれたので、ポリワーノフの言語学的成果については述べなかつた。^[35]

また、日本の言語学界三大奇人というのにも、発表では触れた。発表では静安学社の創設メンバーである浅井惠倫、静安学社の第二回集会から参加の吉町義雄、『大東亜語学叢刊』で「蒙疆蒙古語」を執筆予定だつた江実の三名を挙げた。この時まだ存命だつた父夏樹から教わつた三名である。しかし、この三名が誰もがコンセンサスをもつて、広まつていたわけではないといふ。父は川崎直一をあげる人もいると付け加えた。また、時代とともに、三大奇人の名前が変わっていくものらしい。日本言語学会の会長を務めた故庄垣内正弘京大名誉教授によると、長田夏樹と岸本通夫が入るのだそうだ。^[36]これら「奇人」たちについて、今回は触れるだけにとどめておく。

七、浪華芸文会とウラル・アルタイ学会

戦後、石濱が設立にかかわつた研究会が少なくとも二つある。一つが浪華芸文会であり、もう一つがウラル・アルタイ学会である。石濱の年譜に記載されていないために、これまでほとんど触れられることがなかつた。

さいわい、京都大学をバックボーンとした史学研究会が出版して

いる『史林』に二つの研究会の紹介がある。ここに引用する。

大阪に於ける東洋学研究者の会として、昭和二十四年十一月に浪華芸文会が成立し、爾来毎月研究会を開いて今日に至つた。会員は最初は二十余名であつたが、現在では四十名を越え、神戸京都奈良和歌山方面からも有志者の参加があつて、次第に活気を呈しつゝあるは喜ばしい。

昭和二十四年十一月二十六日

初会合、会の構成及び運営を議決。

同年十二月十七日

江戸初期の詞について

昭和二十五年一月二十九日

武田薬品工業株式会社の工場及び図書館を見学

同年二月二十五日

五穀の起源

篠田 統

同年三月二十五日

曆漫談

同年四月十五日

中江丑吉遺著『中国古代政治思想』

木村 英一

同年五月二十七日

西域の南北道

桑田 六郎

同年六月二十五日

辻本史邑氏邸にて拓本・法帖・文房具等を観賞

書談

辻本 史邑
森田 幸門

同年九月十六日

最近の中国文学

同年十月二十八日

敦煌本神農本草經集注を読みて

渡邊 幸三

同年十一月十二日（ウラル・アルタイ学会と合同）

天理図書館を見学

同年十二月十六日

洛陽伽藍記の研究について

森 鹿三

史学研究会（一九五一・三〇一）

この『史林』に掲載された以外にも、浪華芸文会の活動が報告さ
筆している。

これまでみてきた静安学社とも大阪言語学会とも、浪華芸文会は
あきらかにメンバーがことなる。⁽⁵⁾ 学会とは名乗らず、芸文会として
いる点もことなる。

うえの発表者をみるとおいては、東洋言語学よりも中国科
学史的色彩が強い。『中国食物史』を執筆した篠田統（一八九九—
一九七八）、『東洋天文学史』を執筆した能田忠亮（一九〇一—
一九八九）、『南海東西交通史論考』を出版した桑田六郎（一八九四—

一九八七）、『本草書の研究』を出版した渡邊幸三（一九〇五—
一九六六）、渡邊幸三の『本草書の研究』出版に奔走した森鹿三
（一九〇六—一九八〇）などが発表している。伝統的東洋学研究者と
しては神田喜一郎と中国学者である木村英一（一九〇六—
一九八二）ぐらいだろうか。辻本史邑（一八九五—一九五七）は有名
な書家であり、自宅にお邪魔しての研究会である。すでにみたよう
に、高倉克己は大阪言語学会でも発表している。大阪言語学会、静
安学社、ウラル・アルタイ学会の三者共催の研究会があつたように、
ここでも天理図書館見学はウラル・アルタイ学会との合同でおこな
われている。なお、これら発表者のうち、神田喜一郎、木村英一、
桑田六郎、森鹿三の四名が『石濱先生古稀記念東洋学論叢』にも執

いるが、その名前がいつ変わったか、まだ調べがついていない。⁽⁵⁹⁾

また、詩人として有名だが、東洋史研究者でもあつた田中克己（一九一一—一九九二）の日記がインターネット上で公開されている⁽⁶⁰⁾。

が、そこにも浪華芸文会が登場する。それによると、一九五四年五月は中国哲学史を専門とする森三樹三郎（一九〇九—一九八六）が、また一九五四年十二月には満洲語研究の今西春秋（一九〇七—一九七九）が浪華芸文会の例会で発表している。

つぎに、一九五〇年五月に設立されたウラル・アルタイ学会の紹介文をみておこう。こちらは石濱の名前が全面に出されている。

大阪言語学会が成り、いづれも東洋学関係者を抱合しつつ、逐次成果をあげ来つたのであり、これらの基盤の上にこそ、斯会の誕生もまた可能であつたといえよう。

五月に発足、七月以後諸事情のためしばらく休止状態ののち、越えて十一月より再び活動を開始して年末に及んでいる。左に例会の講師と演題とを記しておく。（敬称略）

五月 挨拶 石濱 純太郎

蒙古語文法書に及ぼせる西藏語文法書の影響

稻葉 正就

六月 外蒙におけるロシア文字使用について

松 源一（精松源一か）

高橋 盛孝

町と村

七月 女真文字金石資料とその解説

長田 夏樹

昨二十五年五月、石濱純太郎教授を中心に結成された「ウラル・アルタイ学会」は、大阪、天理、神戸各外大の東洋語こと

満洲語の研究

石濱 純太郎

に北アジア語学のメンバーに加えるに、阪大、神戸大、関西大

など阪神方面の東洋史専攻者を以てし、北アジア語学と東洋史

学、さらに民族学にたづさわる人々によるコーオペレーション

をなしとげんとしつつあり、この意味において新しい成果が斯

界の今後に期せられるのである。なお、すでに大阪にあつては、

懷德堂を根拠として発足した静安学社があり加えて昭和十六年、

八、内藤湖南・中国学京都学派・石濱シユーレ

父の手元に残っていたハガキから、このウラル・アルタイ学会の事務局は大阪外大蒙古語教室にあつたことがわかつてゐる。その蒙古語教授が精松源一であり、上の紹介文では松源一と誤植されている。発表内容からいつても、まちがいなく精松源一である。

発表者について、簡単に触れておこう。稻葉正就（一九一五—一九九〇）は大谷大学教授として、チベット語文法学やチベット仏教史を教えていた。高橋亨（一八七八—一九六七）は戦前は京城帝國大学で、戦後は天理大学で教鞭をとり、朝鮮学会の創立・運営に関わった。京大人文研の教授だつた岩村忍（一九〇五—一九八八）と神戸大学教授だつた内田吟風（一九〇七—二〇〇三）は東洋史畠である。なお、これらの発表者のうち、『石濱先生古稀記念東洋学論叢』に執筆しているのは精松源一、稻葉正就、内田吟風、長田夏樹、高橋盛孝の五名である。

年譜によると、石濱純太郎は一九四九年からは関西大学文学部教授となり、大阪外大、天理大学にも出向してゐた。一九四九（昭和二十四）年十一月に浪華芸文会が、翌年五月にウラル・アルタイ学会がそれぞれ設立されてゐるが、石濱にとつては忙しい時期である。しかし、こうした研究会や学会によつて、若い人を鼓舞したいといふ情熱があつたのではないだろうか。

石濱純太郎を考えるときに、一番重要なのは内藤湖南の存在である。

石濱が内藤湖南を尊敬していたことはよく知られている。そのことは、高田時雄編（二〇一八）所収の「僕の憂鬱」や「噫内藤湖南先生」を読んでいただければよくわかるので、ここでは引用しない。小論では藤枝晃（一九一一—一九九八）に登場してもらおう。藤枝について、ウイキペディアには「日本の東洋学者。敦煌学および西域出土の古写本研究の第一人者である」と記されているが、京都大学人文研で長く研究生活を送つた人である。⁽⁴²⁾ 石濱が亡くなつたときには、「町人学者・石濱純太郎」を執筆している。⁽⁴³⁾ その中に、こんなことが記されている。

尊敬というよりも崇拜といった方がよいくらいに、湖南先生に傾倒していた。湖南先生のヨーロッパ旅行（一九二四—二五）には自費で随行し、いつであつたか、『蒙古の秘史』の原形の問題について、ある人が石濱先生の見解を質したところ、「それについては内藤先生がこう仰言つてます。だから僕はそのまま信じてます」という調子であり、石濱さんの著書の一つ

『富永仲基』は、湖南先生の発見した大阪の一学者の詳伝であり、『浪速儒林伝』は『関西文運史論』の拾遺か延長といった趣のものである。（中略）

そのように、新奇な資料に真先にとびつくのは、石濱学の何よりの特色である。たいていは「草分けの一人」となるに止まつて、その部門での押しも押されぬ第一人者といつた域まで達したものは、あまりない」と

まつて、その部門での押しも押されぬ第一人者といった域まで達したものは、あまりない。多くの人は、石濱さんと言えば、その博学には敬服しながらも、同時にそういう面を批判する。

先生がなくなつた後で、あらためて著作目録に目を通すうちに、妙なことにさがつた。そこには三十代から四十代、そういう

部門に次々と手をあげて行つた形跡がありありと現れているが、

そういうのは、内藤先生がちょっと紹介しただけのものとか、あるいは全く手を出さなかつた畠のものとかばかりである。ことによると、内藤先生におだてられて妙な勉強にとりついたのかも知れないが、石濱さんの側にも、口先でこそ湖南先生を神様のようにほめちぎつているものの、内心では、ひとつ湖南先生にはできないことを仕出かしてやろうと言つたヤマ氣があつたに違ひない。（藤枝一九六九・三〇—三二）

石濱は湖南に心酔していて、彼の学問を語るとき、いかに湖南の

影が投影されているか。藤枝の指摘には思わず納得させられる。

「新奇な資料に真先にとびつくのは、石濱学の何よりの特色である。

たいていは「草分けの一人」となるに止まつて、その部門での押しも押されぬ第一人者といつた域まで達したものは、あまりない」という批判は長田夏樹からも聞いたことがある。こんなにいろんなものに手を出せたのは財政力とアカデミズムを遠くからみていたからであろう。

藤枝の石濱評以外に、弟子筋にあたる人の石濱評をあげておこう。まず、関西大学における石濱の弟子であつた大庭脩は次のように指摘している。

石濱は、めんどうがりやで、長い原稿を書くことを嫌い、「僕は人の業績の上に小石を載せるのが趣味なんだ」と言うよう、書いた論文はきわめて短いものが多い。その論文を集めた『支那学論攷』（昭和十八年、全国書房刊）を開いてみると、いかに小石か、ただそれは珠玉の作ではあるが、短いものを書いたかよくわかる。しばしばそれが寸鉄人を刺す体の厳しい批判であることも少なくない。（大庭脩一九九四）

次に、石濱の弟子村田忠兵衛もこの大庭の指摘と表裏一体をなす、こんなことを記している。

先生御自身常に「大著に名著なし」といつておられたし、

長々しい論文を見て「誰でも知っていることを、何もわざわざこんなにダラダラと書かんでもよいのになあ」と、呟いておられたのを、今更の如く想起する。又「つまらんことを、持つて廻つて、うまく書き上げたもんだねえ、たしかに彼は文才があるね」といつた辛辣な批評を下されているのを、承つたこともあつた。（村田一九七二・一四）

筆者自身は「人の業績の上に小石を載せる」ことも出来ないし、

「大著に名著なし」とも思わない。むしろ、長々とした大著の方が好きだ。しかし、こういう表現は裏を返せば、藤枝の「たいていは草分けの一人」となるに止まつて、その部門での押しも押されぬ第一人者といつた域まで達したものは、あまりない」という指摘と一脈通じるところがある。第一人者というのは研究の総決算ともいすべき大著をまとめるのが一般的なのである。

内藤湖南は中国学（Sinology）京都学派の創始者であり、京都学派を背負つて立つと言われるだけあつて、通史や概説書をたくさん書

いた。しかも大阪朝日新聞にいたこともあつて、大阪の文化にも理解があつた。一方、石濱は内藤のように最初から京都学派を背負う気もないので、「人の業績の上に小石を載せる」ことに終始し、「大著」を書くこともなかつた。また、内職を禁じていた国立大学の教

授になることは、家業である丸石製薬からの収入を絶つことになる。

そういうことを考えると、アカデミズム的な出世をはじめから拒否していたのではなかろうか。大学での職を得ていたら、きっと体系立てた研究が必要であり、悪く言えばつまみ食い、よく言えば広い視野の下、研究を続けることはできなかつたであろう。ひとつ的研究を深く長く続けることよりも、広く浅くやることを最初から意図していたようだ。いかがだろうか。また、それを自指したのは石濱自身、湖南みたいには到底なれないという思いも根底にはあつたのではなかろうか。

一方で、石濱純太郎は大阪を常に意識して⁽⁶⁴⁾きた。江戸時代の学問所である「懐徳堂」や漢学塾であつた「泊園書院」の伝統を絶やすまいとする意志があつた。設立する学会の名前は「大阪東洋学会」であつたし、「大阪言語学会」であつた。また、誰も注目していないが、「静安学社一覧」の奥付には大阪静安学社と書かれているのだが、大阪への思いがそうさせていたのであろう。

石濱自身が大阪の学問について、こんな風に述べている。

（大阪には）堅苦しい学者はいらないのである。それよりは開けた頭の持主がいいわけである。実用向きの学者、趣味向きの学者である。だから大阪での学問界は自由で開放されたものである。江戸のように堅苦しい官学があるでもなく京のように伝

統のうるさい学問がはゞをしているでもない。好きで学問をするなら思う方に行くことが出来るのだから町人にはもつてこいと云う風である。それならば荒唐無稽な奇僻なものになりはしないかと云うにそれでは実用向きではない。修養趣味からはその行過ぎたものは嫌われる。兎に角他に比較すると自由であつた。（石濱一九四七・九）

譜⁶⁵によると、大阪言語学会と石濱純太郎のことが以下のように出てくる。

一九四九年

九月 大阪言語学会（於大阪外大）で、「トルコ・モンゴル比較言語学方法論について」と題して研究発表する。大阪言語学会の創立者である石濱純太郎先生の恩顧を得て、女真語や契丹語の研究に本格的に取り組み始める。

十月 大阪言語学会（於大阪外大）で、「原始日本語の音韻とアクセントに就いて」と題して研究発表する。

ここにはあきらかに東京の官学でもない、京都の伝統でもない、自由なる大阪の学問というものがはつきりと提示されている。内藤湖南の京都学派のようなものは望まぬも、自分は大阪町人学派とでも呼ばれるものを創設したいという気概があつた。それが「石濱シユーレ」と呼びたくなる一つの要因である。

石濱純太郎の周辺に集まつた人々が集う場を、藤枝は「石濱サロン」と呼んでいる。それは昭和十年代までのことなのだろう。あるいは、藤枝のように静安学社に参加せず、自宅に遊びに行つた人々にとつては、サロン以外の何物でもなかつた。それは容易に想像がつく。しかし、長田夏樹から聞く、大阪言語学会での石濱は少し違つていた。もうすでに六十歳を超えて、自分がやれることの限界を悟つていたのだろう。石濱は若い研究者を鼓舞するだけではなく、研究を割り振つていた。それが父夏樹の証言である。

大阪言語学会の月例会で二ヶ月続けて発表し、「石濱純太郎先生の恩顧を得て、女真語や契丹語の研究に本格的に取り組み始める」とある。ここに女真語と契丹語があげられている。その裏には、夏樹自身は西夏語もやりたかつたようだが、石濱に「西夏語には西田龍雄君がいるのだから、君は契丹語、女真語に集中しなさい」と言われたのだという。その代わり、女真語や契丹語関連の文献はすべて貸していただいたそうだ。

石濱は好きなことをやり、これまで誰もやらない分野を開拓してきた。しかも、製薬会社の財力で、西洋、東洋を問わず、いろんな分野の文献を多く集めてきた。石濱本人の自由人的性格からいつて、

石濱が設立した静安学社や大阪言語学会もサロン的な雰囲気で、特段教育的配慮がなされないのでないかと勝手に思いこんできたのだが、この父の話によれば、大学の指導教官がおこなうことを石濱もやつていたことになる。そこでピーンとひらめいた。これこそまさに「石濱シユーレ」と呼ぶのがふさわしいのではないか。そんな思いから、一九九五年の発表の際に、「石濱シユーレ」を使用した。これが石濱シユーレと名付けた理由である。父自身、この命名を喜んでくれた。

戦後、日本国中が飢えていたころ、石濱の様子を藤枝はこう指摘している。

昭和二十四年から先生は関西大学の専任教授となつた。よん

だ側にも行つた側にも、のつびきならぬ事情があつてのこととは判るが、その外の諸大学の講師は従前通りづけたから、休む日もない日常となつた。そうなつてからの先生も、やはり町人学者として通つていたようであるが、それは当たらない。その頃は、もはや町人学者ではなく、一介の大学教授に成り下がつていたのだから。(藤枝一九六九・三三)

藤枝の皮肉がこもつた、しかし愛情あふれる表現である。石濱の著作目録を見ればあきらかだが、あれだけ海外の東洋学事情を紹介

してきたのに、戦後はぱつたりと消えてしまった。文献購入の財政的余力もなく、非常勤などに取られる時間もあつてか、執筆時間もなかつたのかかもしれない。高田時雄編(二〇一八)をみても、『西北文化研究』の「はしがき」以外、関西大学教授就任以降のものは極端に少ない。

九、おわりに

小論は石濱純太郎の生涯と彼が関係した学会や研究会に集う人々について述べてきた。冒頭で述べたように、基本的には日文研での発表レジュメに沿つてまとめているが、最近の研究成果も取り入れている。

じつは、石濱はここで述べた以外にも、学会や研究会に関わつてゐる。一九二〇(大正九)年に設立した泊園書院学会では幹事を務めている。⁽⁶⁵⁾ 一九二七(昭和二)年には音声学協会第一回大阪例会に、後に静安学社に参加する浅井恵倫、川崎直一、吉町義雄らとともに、参加している。⁽⁶⁶⁾ 同じ年の第二回大阪例会では、ネフスキーや参加し、石濱が藤井玄伸『世話類聚』という大阪方言の珍本を紹介している。⁽⁶⁷⁾

戦後においても、一九四八(昭和二十三)年十一月二十三日の神戸言語学会の発会記念講演会として、石濱は「言語学と文字学」と題して発表をしている。⁽⁶⁸⁾ 神戸言語学会は大阪言語学会に触発されて設

立されたことはまちがいない。

小論では石濱が設立にかかわった学会や研究会をみてきたが、石濱純太郎が何よりも素晴らしいのは、学者たちのネットワークを形成したことであつた。⁽⁷⁾ 石濱よりも二世代上の内藤湖南をはじめとする中国学京都学派の人々にはじまり、ほぼ同世代の武内義雄や石田幹之助、そして次の世代の神田喜一郎、高橋盛孝などと、広い専門分野を誇る人々と交流を続け、その交流の場として、こうした学会や研究会を作り続けた功績は計り知れない。また、石濱よりは世代が少し若い、浅井恵倫、吉町義雄、川崎直一、あるいは息子の

ような年代の岸本通夫や長田夏樹といった「奇人」と呼ばれるような言語学関係者を鼓舞し続けたのも石濱でしか成し得なかつた。出世や人事といつた学術外要因が生じやすい大学という枠組みでは、きつとうまく行かなかつたであろう。

しかも、石濱の構築したネットワークは単に国内にとどまらない。

王国維や静安学社の社友である羅福成といつた中国人研究者、そしてネフスキーや静安学社の名誉社友であるコンラッドや社友であるシユーツキーといつたロシア人研究者たちと交流を重ねている。王国維の字をもつて、静安学社が名付けられ、ネフスキーとは一緒に静安学社を結成し、ともに西夏語研究をおこなつてゐる。昭和の初めにこうしたネットワークを構築した人は他に類をみない。しかも、中央政府や帝国大学の力を借りずに、大阪の町人学者として、それ

を成し遂げたことは空前絶後と言つていゝだらう。

石濱純太郎について、また彼の設立した学会や研究会に集う人々について、小論ですべてが語りつくされたわけではない。しかし、小論は一九九五年に発表した「石濱シユーレ・露人日本学者・言語学界三大奇人」の大枠を織り込んでまとめることが出来たのではないかと思つてゐる。辻惟雄先生に読んでいただければこの上ない喜びである。

注

(1) 小論の草稿段階で、堤一昭阪大教授、および査読者が丁寧に読んでくださり、コメントをいただいた。また、文献収集には地球研事務の紀平朋さん、松田賀永子さん、田中美生さんに大変お世話になつた。名をあげて感謝の意を表したい。

(2) 石濱純太郎の表記については、堤教授のご指摘にしたがい「石濱」に統一している。混同を防ぐために、引用についても、「石濱」として「石浜」は使用しなかつたことを注記しておく。

(3) なお、吾妻編(二〇一〇)『泊園書院歴史資料集——泊園書院資料集成1』には、「石濱純太郎主要著作目録」(三二七—三二二頁)があり、簡単な内容紹介も付されている。

(4) ここにあげた生没年については筆者が追加した。

(5) 『古稀記念』の「年譜」では「歐陽脩研究」となつていたが、石濱文庫の中から、堤一昭によつて「自筆稿本類」が発見され、「歐陽脩攻究」だとあきらかにされ(堤二〇一八)、「補訂」では修正されている。吾妻(二〇一九

b・三七）にはその卒論の表紙写真が掲載されている。なお、堤一昭大阪大学教授の石濱文庫関連の論文を堤教授からご恵送賜つた。

(6) ウィキペディアを論文に使用することに査読者から疑問が寄せられたが、小論の中心的人物ではない方々については積極的に利用している。その理由はコロナ禍もあり、図書館に行って辞典類など参考図書を見ることが難しい状況がある。なお、以下を参照した。<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%AD%AE%A5%86%85%E7%BE%A9%E9%9B%84>（一一〇一二一年十月二十九日閲覧）

(7) 以下を参照した。<https://korobank.jp/word/%E6%AD%A5%85%86%85%E7%BE%A9%E9%9B%84-1088422>（一一〇一二一年十月二十九日閲覧）

(8) 青木正児（一九一〇）「佐賀東周君を悼む」『支那学』一卷一号 七五—七七頁を参照。

(9) 支那学社同人（一九二五）「福井貞一君を悼む」『支那学』三卷一〇号 八六一八八頁を参照。

(10) この堤論文が掲載されている同じ論集に、吾妻（二〇一九・七三）が「堤一昭氏のご教示によれば、大正五（一九一六）年四月二十五日、景社の例会に石濱と内藤がともに参加した記録があるため、二人の出会いはこの時に遡る可能性があるとのことである。ただしすぐあとに引用するように、石濱自身、麗澤社と景社の連合会で内藤と初めて会つたと述べているので、

四月の景社例会では二人は参加していたとしても話は交わさなかつたのではあるまい」と指摘しているが、堤の論文を読まずして書いたものであろうか。また、「二人は参加していたとしても話は交わさなかつたのではあるまい」ということは、石濱の性格からいつて、ありえないようと思うのだが、いかがだらうか。

(11) 堤（一一〇一二二）の報告によると、一九二七年六月二十二日の『東京日日新聞』に「京大の羽田亨博士と大阪の石濱純太郎氏と、そしてこの石田氏の三人を結んで、西域研究における三鼎と斯界では呼んでゐる。各自それ

ぞれに確乎たる基礎学問をもつて、東洋文明の源流といふべき西域の研究に入りつつあるのであるから、この上は欧米学者の根気よさを体得さへすれば、この方面における三人男たる期待には背かないだらう」との記事が出てゐる。

(12) なお、この日記の記述は大原良通（一一〇一九・三九五）にも引用されている。大原は河崎（一九六九）を引いて、「石濱先生のお若い頃、羽田亨博士とは学問上いろいろあつたようで、石濱先生独特的調子で反論などをされ、それが学問以外の御交誼にも現れていた様子です」と指摘している。

(13) 今西龍（一八七五—一九三二）を指す。朝鮮史を専門とし、一九一三年に京大講師となり、一九二二年、博士号を取得し、一九二六年からは京都帝国大学と京城帝国大学の兼任教授となつた。なお、息子の今西春秋（二九〇七—一九七九）は満洲史の研究者で、一九六一年に博士号を取得している。

(14) 年譜によると、「大阪外国语学校蒙古語部へ選科委託生として入学す」とある。これについて、堤阪大教授から「選科生と委託生は別個の制度で、石濱は前者なので『蒙古語部選科生』と記された方が良い」とのご指摘を受け、その出典として、大阪外国语大学七十年史編集委員会編『大阪外国语大学七十年史』一四頁をご教示賜つた。

(15) 『京都帝國大学文学部三十周年史』（一九三五年）による。

(16) なお、この日記の記載については岡崎精郎（一九七九・一三八八）にも言及されている。堤阪大教授はお忙しい中、岡崎の論文をコピーして送つてくださいました。

(17) 中目覚の生涯については、石田寛（一一〇〇〇）「エリート教授中目覚」が詳しい。石田は中目を絶賛している。

(18) 生田（二〇一九・一九七）では「蒙古語動詞の活用と其種類」と間違つてゐる。

(19) 生田（二〇一九・一九七）では「渡辺薰太郎」と誤記されている。以下

すべて「渡辺薰太郎」となつてゐる。

- (20) 国会図書館サーチによると、一九三三年一月にも「増訂」として第二号が出版されている。実際、上原（一九六六・二二）によると、「渡部薰太郎は昭和八年一月十六日に『亞細亞研究』第二号の増訂版を発行した。伊徳均の「蒙語動詞の活用と其種類」は前者と全く同一であつて、増訂されていいるものは、渡部の書いた「満洲語女真語と漢字音の関係」だけである」とある。つまり、第三号が初版と増訂版の二度出版されているのと同様、第二号も初版と増訂版の二度出版されている。なお、上原（一九六六・六）は大阪東洋学会については「この学会の組織・成立等一切は不明である」と述べてゐる。
- (21) 国会図書館サーチによると、一九三七年にも出版されている。こちらには増訂とは書かれていないし、頁数も同じなので、二刷と思われる。
- (22) エルズワース・ハンチントン（一八七六—一九四七）はアメリカのエンル大学教授で、アメリカ地理学会の会長も務めた人である。環境決定論的な著作『気候と文明』は一九二八年に日本でも翻訳され、一九三八年には間崎万里訳で岩波文庫にも収録された。
- (23) 一九二八年出版。以下、通報と略す。第二号以下が出版されたかどうかについては確認できていない。この通報は石濱文庫以外にも、九州大学図書館に収められていることを確認している。静安学社の社員だった吉町義雄は九州大学に勤務していたので、彼が寄贈したものと推測される。また、生田美智子編（二〇〇三）『資料が語るネフスキイ』（三六一四六頁）に全文が掲載されている。
- (24) なお、一九三二年段階ですでに社員と社友の区別はなく、初期の社員だつた石濱はじめ、物故者（財津）を除く全員が社友となつてゐる。
- (25) 校正中に、北村信昭（一九八三）『奈良いまは昔』（奈良新聞社刊）を読む機会を得た。北村によると、笛谷良造は「大阪の布施でネフスキイの隣家に住み、静安学社へはネフスキイの紹介で入会されている」と指摘して
- (26) 渋井、吉町、高橋の三人については、いずれ別稿で取り上げる予定である。
- (27) 一九三一年六月、静安学社の名前で、「故財津愛象」と題して、「年譜略」及び「遺著遺墨陳列目録」を出版してゐる。
- (28) 以下を参照。<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B0%8F%E9%97%E5%A4%AA%E5%B8%82%E9%83%8E>（一〇二一年十月二十九日閲覧）
- (29) 小林太市郎著作集が出版されているが、『王維の生涯と芸術』や『中国陶磁見聞録』など、東洋学に関連した著作も見られる。
- (30) 西田長左衛門はこの当時、浪速高校教授である。『関西大学学報』（五八号）に掲載された、昭和十三年度の関西大学授業一覧によると、国語漢文専攻科で石濱が「書經・日本漢学史」を担当し、西田長左衛門が「荀子・韓非子・支那哲学史」を担当している。『静安学社一覧【昭和十六年】』によると、一九四一年二月一日に享年六十八歳で亡くなつてゐる。
- (31) 岩代はその当時大阪府立今宮中学校教諭であるが、教育者として、作曲家の父親として、ウイキペディアに掲載されている。
- (32) 金戸もその当時大阪府立今宮中学校教諭である。国会図書館サーチによると、一九七〇年代に四天王寺女子大学紀要に「史記論語考」などを掲載していることから、晩年は四天王寺女子大に勤務していたと思われる。
- (33) ネフスキイの評伝をまとめた加藤（一〇一・一八九）は「これ（＝静安学社）は四年前大阪外国语学校の中で結成した大阪東洋学会延長発展であつた」と指摘している。しかし、この加藤の指摘に對して、生田編（一〇〇三・三五）において「しかしながら、メンバーは似通つてゐるが、この二つは同時期に存在した別の組織である」と指摘するように、まったくの別組織である。
- (34) あきらかに大阪外国语学校長の誤植だが、学長とするための作意すら感じられるという言い過ぎか。
- (35) 『静安学社通報』第一期（一九二七）では、Societas Orientalis, Osaka in

いる。

Memoriam Wang Kuo-wei ウーラテン語表記されているが、『静安学社一覧【昭和七年】』では、Societas Orientalis Osakaensis in Memoriam Wang Kuo-wei と表記されている。

(36) その時の発表者と題目は、高橋盛孝「ギリヤク語の新らしい資料」、長田夏樹「原始日本語の音韻とアクセントに就いて」、高倉克己「支那語法のこと」である。

(37) 川崎直一の略歴などについては、父・長田夏樹の手元にあった資料に基づいている。川崎とエスペラント語については『日本エスペラント運動人名事典』(ひつじ書房、二〇一三年)一二二頁にくわしい。この事典については、藤原敬介京大特定准教授(現・平成科学大学准教授)がコピーして送ってくれた。

(38) 宮武正道については、妻による追憶(宮武タツエ一九九三)、最近では黒岩康博(二〇一一)がある。また、高田時雄編(二〇一八・一二一)一二三)に掲載されている「石濱「にぶき良心で」は一九四五年一月の『文芸春秋』に掲載された宮武追悼文である。

(39) 堤阪大教授によると、「石濱が関西大学教授になつたのは一九四九年で、この叢刊の企画がスタートした一九四一年はこの職にありません」との指摘を受けたが、この『大東亜語学叢刊』の一冊、宮武正道『マレー語』の巻末に掲げた一覧表をそのまま掲載している。

(40) 本稿執筆後に、『大阪言語学会要覧』がみつかつたが、それによると、大阪を離れて台北に赴任した浅井惠倫を除けば、全員が大阪言語学会の会員である。

(41) 『大阪言語学会要覧』によると、高倉克己の名前は大阪言語学会の名簿には掲載されていない。

(42) 江尻英太郎については、村嶋英治(二〇一〇)「タイ国における第二次世界大戦終結迄の日本語教育の歴史——未利用資料を中心に」『アジア太平洋研究』三九・一五九を参考にした。その論文の注³⁴に江尻の履歴などが

詳細に述べられている。

(43) 大阪言語学会の一九四九年四月に発行された名簿をみると、上にあげたうち、吉町義雄を除いて、すべてが大阪言語学会の会員である。戦後の大阪言語学会の規約では、大阪周辺に住んでいる人のみが会員となつてゐるので、九州大学の吉町義雄は会員から外れたのであろう。また、静安学社の社友ではないが、大阪言語学会の会員である五島忠久がバントウー諸語を担当している。

(44) 大阪外語大学の蒙古語教室、つまり精松源一(一九〇三—一九九三)が学会運営にかかわっていたと思われる。滋賀県立大学の精松文庫があるが、そこに何か手掛かりが残されているのかもしれない。

(45) 父の手元には大阪言語学会以外のウラル・アルタイ学会(UA)と静安学社(SA)から別々の案内があり、それぞれ講演題名がことなる。石濱の講演題名は「ラムステッドの著書の解説と展観」(UA)「ラムステッドの著書展観と解説」(SA)、西田は「古代アルタイ語学」(UA, SA)、石本は「題未定」(UA)、SAでは上と同様の題、長田夏樹(大阪言語学会の案内では長樹と誤植されている)は「アルタイ比較言語学創始者の一人としての博士を偲ぶ」(UA)「蒙古語とトルコ語」(SA)となつてゐる。父によると、UAでの題名が実際の講演タイトルだといふ。

(46) 二〇一九年に上映されたフィンランド映画『東方の記憶』は、ラムステッドの回顧録を基にして制作されたドキュメンタリーである。ただし、筆者未見。

(47) 以下を参照した。<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%BF%E3%82%BB%E3%82%B9%E3%82%BF%E3%83%BC%C3%83%83%95%EF%83%BB%E3%83%83%A9%E3%83%A0> (1)〇一一年十月二十九日閲覧)

(48) 『大阪エスペラント運動史』(一九七七年)四頁より引用。

(49) エスペラントからの翻訳については藤原敬介京都大学特定准教授(現・

平成科学大学准教授）と千田俊太郎京都大学准教授から教わった。名をあげて感謝したい。いずれ、何らかの形で出版したい。

a・b) など、ボリワーノフの業績を振り返る論文が出ている。

- (50) 「著作目録」によると、「メラネシア語の研究」『東洋研究』七（11・13）にあるが、正しくは「メラネシア語派の研究」『東洋史研究』七（11・13）：一二七一—三五である。
- (51) 石濱（一九四二・一二七）からの引用。この論文には言語の記述に関しては一切言及がない。

- (52) 雑誌『英語青年』には大阪言語学会の開催通知が掲載されている。確認されたもので、『英語青年』八八巻四号（一九四二）「第五回例会を十月二十五日午後一時より大阪懐徳堂で静安学社と合同して開催した」（一二五頁）とあり、九三巻八号（一九四七）「五月十一日午後一時より天王寺高女に於いて例会を開き」（二八六頁）とあり、九四巻一号（一九四八）「昨年九・十・十一月の夫々第二日曜日に天王寺高女にて例会を開き十・十一月は大阪印度学会と合同した」とある。懐徳堂は大阪大空襲で焼失したため、会場を天王寺高女としている。大阪印度学会がどのような組織だったのかはわからない。一九四八年の大坂言語学会では、石濱純太郎が「甲骨文字展観」（九月）と「無量寿宗要経展観」（十月）と題して二回発表している。なお、この論文を執筆したのち、大阪言語学会の例会を紹介した『大阪言語学会要覧』が父の遺品から見つかった。それに基づいた大阪言語学会に閲する論文を別稿として発表する予定である。

- (53) 村山七郎「訳者あとがき」ボリワーノフ、村山七郎編訳（一九七六・一二二九頁）による。
- (54) 桜山真一（二〇一〇）「ネフスキイの借家を訪れた人たち（二）佐々木喜善とエヴゲーニイ・ボリワーノフ」『なろうど・ロシア・フォーカロアの会報』八〇・一〇一・七によると、ネフスキイとボリワーノフは一九一六年八月下旬に、東京にあつたネフスキイの借家で会つたという。
- (55) 村山七郎編訳（一九七六）出版以後、杉藤（一九八三）、早田（一九九九）
- (56) 岸本通夫（一九一八—一九九一）は東大仏文科を卒業後、東大大学院・京大大学院で梵文科へすすみ、日本では、やり手がいなかつたヒッタイト語研究に取り組んだ。五十か国語に通じたと言われた、典型的なボリグロットである。
- (57) 父の手元にあつた「浪華芸文会名簿」（一九五一年三月）と「大阪言語学会要覧」（一九四九年四月）を比べると、両方とも会員となっているのは石濱純太郎を除くと、岡崎精郎と長田夏樹の二人だけである。
- (58) 「王靜安先生を追想する」『懐徳』二二・六七一七七頁。一九五一年。
- (59) 次の注で紹介している田中克己日記によると、一九四六年十一月三日には静安学社とあり、一九五二年六月一日には静安学会とある。
- (60) <https://shiki-cogito.net/tanaka/yakoun/tanakadaihy.html> (一一〇二一年五月一日確認)。長田夏樹によると、田中克己も石濱シユーレの一員だつたそうだ。
- (61) この紹介文をだれが書いたのかわからないが、「すでに大阪にあつては、懐徳堂を根拠として発足した静安学社があり加えて昭和十六年、大阪言語学会が成り」のなかに、大阪東洋学会が並列的にあげられていない。大阪東洋学会が静安学社や大阪言語学会とは異質であることの傍証になるだろう。
- (62) 以下を参照。[https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%97%A4%E6%9E%9D%E6%99%96%83 \(一〇二一年十月二十九日閲覧\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%97%A4%E6%9E%9D%E6%99%96%83_(一〇二一年十月二十九日閲覧))
- (63) 藤枝晃「町人学者・石濱純太郎」のコピーを堤阪大教授からご惠送賜つた。なお、この藤枝の追悼文は関西大学泊園記念会編（一一〇一八）『石濱純太郎記事集』の四九一五〇頁に再録されている。
- (64) 戦後すぐの一九四七年に、石濱は「大阪は学問の土地でないかも知れない。然し熱心な学徒はいつの時代でもあるのである。我等の小さい学会も存在する」（高田時雄編二〇一八・三八）と述べている。この「小さい学会」について、編者の高田は「大阪東洋学会」と「静安学社」をあげてい

るが、時期的には「大阪言語学会」をさしているのではなかろうか。

- (55) <http://www.firebaseio-pu.ac.jp/museum/pdf/nenpu.pdf> (一〇一二年四月二十八日確認)

- (66) 吾妻重二編 (一〇一〇) 「第六章 石濱純太郎 二、泊園書院学会の設立」参照。

- (67) 浅井恵倫 (一九二七^a) 「第一回大阪例会記事」『音声学協会会報』第五号五頁参照。

- (68) 浅井恵倫 (一九二七^b) 「第二回大阪例会記事」『音声学協会会報』第六号一一頁参照。なお、この音声学協会と不フスキーの関係については、生田編 (一〇〇三・三四) にも記載されている。

- (69) 『神戸言語学会会報』第一号八頁参照。

- (70) 堤一昭阪大教授が研究代表者になって、共同研究がおこなわれたが、そとのタイトルが「東洋学者・石濱純太郎をめぐる学術ネットワーク」である。当を得たタイトルであり、まとめて使わせていただいた。なお、その報告書を堤教授からご恵送賜つた。

石濱純太郎 (一九四二^b) 「序」宮武正道『大東亜語学叢刊マレー語』朝日新聞社。V—IV頁。

石濱純太郎 (一九四七) 「町人学者」『日本美術工芸』五三・八一二頁。

上原久 (一九六五) 「渡部薰太郎の満洲語学 (一)」『埼玉大学紀要・人文科学篇』

上原久 (一九六六) 「渡部薰太郎の満洲語学 (二)」『埼玉大学紀要・人文科学篇』

上原久 (一九六六) 「渡部薰太郎の満洲語学 (三)」『埼玉大学紀要・人文科学篇』

参考文献

青木正児 (一九二〇) 「佐賀東周君を悼む」『支那学』一 (一) : 七五一七七頁。

浅井恵倫 (一九二七^a) 「第一回大阪例会記事」『音声学協会会報』五・五頁。

浅井恵倫 (一九二七^b) 「第二回大阪例会記事」『音声学協会会報』六・一一頁。

吾妻重二 (一九二七) 「新聞『泊園』について——昭和初期における泊園書院の記録」『東アジア文化交渉研究』一〇・三八九一四〇九頁。

吾妻重二 (一九二九^a) 「石濱純太郎先生年譜略 補訂版」吾妻編。九一二三頁。

吾妻重二 (一九二九^b) 「石濱純太郎の修業時代——新資料を中心に」吾妻編。二七一七六頁。

吾妻重二編 (一〇一〇) 『泊園書院歴史資料集——泊園書院資料集成1』関西大学出版部。

吾妻重二編著 (一〇一九) 『東西学術研究と文化交流——石濱純太郎没後50年記念国際シンポジウム論文集』関西大学出版部。

生田美智子 (一〇〇〇) 「ニコライ・アレクサンドロヴィチ・ネフスキーをめぐる新事実」『大阪外国语大学論集』二三・六七一八五頁。

生田美智子 (二〇一九) 「石濱純太郎とロシアの東洋学者との日露文化交流——ネフスキーを中心にして」吾妻編。一八九一二二頁。

生田美智子編 (一〇〇三) 『資料が語るネフスキー』大阪外国语大学。

石田寛 (一〇〇〇) 「エリート教授中目覚——一番目に早い高等教育地理 (広島高師) プログラム創始者」『広島大学史紀要』二・四三一七六頁。

石濱純太郎 (一九三四) 『東洋思潮 滿蒙言語の系統』岩波書店。

石濱純太郎 (一九四二^a) 「メラネシア語派の研究」『東洋史研究』七 (一・三) :

一二七一三五頁。

石濱純太郎 (一九四二^b) 「序」宮武正道『大東亜語学叢刊マレー語』朝日新聞社。V—IV頁。

石濱純太郎 (一九四七) 「町人学者」『日本美術工芸』五三・八一二頁。

上原久 (一九六五) 「渡部薰太郎の満洲語学 (一)」『埼玉大学紀要・人文科学篇』

上原久 (一九六六) 「渡部薰太郎の満洲語学 (二)」『埼玉大学紀要・人文科学篇』

上原久 (一九六六) 「渡部薰太郎の満洲語学 (三)」『埼玉大学紀要・人文科学篇』

上原久 (一九六六) 「渡部薰太郎の満洲語学 (四)」『埼玉大学紀要・人文科学篇』

大阪静安学社 (一九三二) 『静安学社二覽』【昭和七年】

大阪静安学社 (一九三三) 『静安学社二覽』【昭和八年】

大阪静安学社 (一九三四) 『静安学社二覽』【昭和九年】

大阪静安学社 (一九三五) 『静安学社二覽』【昭和十年】

大阪静安学社 (一九三六) 『静安学社二覽』【昭和十一年】

大阪静安学社 (一九三七) 『静安学社二覽』【昭和十二年】

大阪静安学社 (一九三八) 『静安学社二覽』【昭和十三年】

- 大阪静安学社（一九三九）『静安学社一覧【昭和十四年】』
大阪静安学社（一九四〇）『静安学社一覧【昭和十五年】』
大阪静安学社（一九四二）『静安学社一覧【昭和十六年】』
- 大庭脩（一九九四）「石濱純太郎」江上波夫編『東洋学の系譜第二集』大修館書店。
- 大原良通（二〇一九）「石濱純太郎の日記と学問——大正二年から昭和二年にかけて」吾妻編。三八一一四一九頁。
- 岡崎精郎（一九七九）「大阪東洋学会より静安学社へ——大阪学術史の一こまと論集」朋友書店。一三八三一一四〇二頁。
- 長田俊樹（一九九八）「比較言語学・遠隔系統論・多角比較——大野教授の反論を読んで」『日本研究』一七・四〇四一三七三頁。
- 長田俊樹（二〇〇三）「日本語系統論はなぜはやらなくなつたのか」ヴァオヴィン・長田編『日本語系統論の現在』国際日本文化研究センター。三七三一
- 長田俊樹（二〇〇五）「日本語の混淆言語説」井波律子・井上章一編『日文研叢書 表現における越境と混淆』国際日本文化研究センター。一六九一
- 長田俊樹（二〇一七）「はたして言語学者はふがいないのか——日本語系統論の一断面」井上章一編『學問をしばるもの』思文閣出版。一〇一二九頁。
- 長田俊樹（二〇二〇）「日本語の起源はどのように論じられてきたか——日本語学序説」長田編『日本語「起源」論の歴史と展望』三省堂。三一五一三四頁。
- 長田俊樹（二〇二一 a）「知られざる言語学者・菊池慧一郎——日本言語学史外伝」『KOTONOHA』二一九・一一九頁。
- 長田俊樹（二〇二一 b）「知られざる言語学者・菊池慧一郎補遺」『KOTONOHA』二二〇・一九一三七頁。
- 長田俊樹編（二〇二〇）『日本語「起源」論の歴史と展望』三省堂。
- 長田夏樹（一九六六）「大阪東洋学会の『亞細亞研究』と『奉天図書館叢刊』について」『水門——言葉と歴史』第八号・一七一二七頁。
- 懐徳堂記念会編（一九五一）「王靜安先生を追憶する」『懐徳』二二・六七一七七頁。
- 加藤九祚（一九七六）『天の蛇——ニコライ・ネフスキイの生涯』河出書房新社。
- 加藤九祚（一九九二）『完本天の蛇——ニコライ・ネフスキイの生涯』河出書房新社。
- 黒岩康博（二〇一二）「宮武正道の『語学道楽』——趣味人と帝国日本」『史林』九四（二）・一二五一一五三頁。
- 神戸言語学会（一九四九）『神戸言語学会会報』第一号。
- 史学研究会（一九五二）『彙報』『史林』三四（三）・二九七一三〇三頁。
- 杉藤美代子（一九八三）「長崎県三重村におけるE. D. ポリワーノフ」『大阪樟蔭女子大学論集』二〇・一九一一二一〇頁。
- 支那学社同人（一九二五）「福井貞一君を悼む」『支那学』三（一〇）・八六一八八頁。
- 高田時雄編（二〇一八）『石濱純太郎 続・東洋学の話』臨川書店。
- 高橋盛孝（一九四二）『大東亜語学叢刊 樺太ギリヤーク語』朝日新聞社。
- 高橋盛孝（一九五九）「ネフスキイ氏について」『日本民俗学大系』平凡社。
- 堤一昭（二〇一二）「石濱純太郎を紹介する新聞記事二件（一九二三年、一九二七年）および解説」堤一昭編『石濱文庫の学際的研究——大阪の漢学から世界の東洋学へ』平成二十三年度大阪大学文学研究科共同研究研究 成果報告書。一六一二二頁。
- 堤一昭（二〇一三）『東洋学者・石濱純太郎をめぐる学術ネットワークの研究』平成二十四年度大阪大学文学研究科共同研究研究成果報告書。

堤一昭（二〇一八）「石濱文庫所蔵 石濱純太郎自筆稿本類の発見——明治末年

の「支那文学科」の学修、大正初年の「文会」の資料として』『待兼山論叢

文化動態論篇』五二・二・一三九頁。

堤一昭（二〇一九）「石濱純太郎は、いつ内藤湖南に出会ったのか?——新出資

料『景社紀事』の紹介も兼ねて』吾妻編。二九七・三一六頁。

羽田亨（一九四二）「序」宮武正道『大東亜語学叢刊マレー語』III—IV頁。

早田輝洋（一九九九^a）「V. M. アルバートフ『E. D. ポリワーノフの遺産

より』について（上）『アジアアフリカ言語文化研究所通信』九〇・一七

—二三頁。

早田輝洋（一九九九^b）「V. M. アルバートフ『E. D. ポリワーノフの遺産

より』について（下）『アジアアフリカ言語文化研究所通信』九一・一

一〇頁。

桧山真一（二〇二〇）「ネフスキイの借家を訪れた人たち（一）佐々木喜善とエ

ヴゲーニイ・ポリワーノフ」『なろうど・ロシア・フォークロアの会会報』

八〇・一〇一・七頁。

藤枝晃（一九六九）「町人学者・石濱純太郎」『図書』一二三四・三〇一三三頁。

ポツペ（一九七六）「E. D. ポリワーノフの思い出」ポリワーノフ、村山七郎

編訳『日本語研究』弘文堂。

ボリワーノフ、村山七郎編訳（一九七六）『日本語研究』弘文堂。

松本茂雄編（一九七六）『大阪エスペラント運動史』柏原エスペラント資料セ

ンタ一。

宮武タツエ（一九九三）『宮武正道追憶』（私家版）

宮武正道（一九四二）『大東亜語学叢刊 マレー語』朝日新聞社。

村嶋英治（二〇二〇）「タイ国における第二次世界大戦終結迄の日本語教育の歴

史——未利用資料を中心に』『アジア太平洋討究』三九・一一五九頁。

村田忠兵衛（一九七二）「大壺石濱純太郎先生・人と生涯——特に大阪人とし

て」『懷德』四一・五一二〇頁。

村山七郎（一九七六）「訳者あとがき」ポリワーノフ、村山七郎編訳『日本語研

究』弘文堂。

アントウアヌ・メイエ、マルセル・コーラン監修、泉井久之助監訳（一九五四）

『世界の言語』朝日新聞社。

湯浅邦弘（二〇一九）「石濱純太郎・石濱恒夫と懐徳堂」吾妻編。二八五—

二九六頁。

二九六頁。